

《修士論文要旨》

インターネット依存傾向とパーソナリティの関係

～原子価構造の影響に関する実証的研究～

瀧 一 世*

I. 問題と目的

平成22年度でインターネットの利用者は9,408万人となっている。しかし、インターネットが普及するにつれて、インターネットに関連する様々な問題が見られるようになった。その中の1つとして、インターネット依存症があげられ、これまで様々な研究が行われてきた。インターネット依存症の研究として、小川（1998）は、インターネット依存症になりやすい人の特徴として、希薄な対人関係を挙げている。またインターネット依存傾向を測る尺度も開発されてきた。

しかし、これまでのインターネット依存傾向尺度はインターネット依存を利用頻度と身体的悪影響の2つの観点から理解しようとしている。しかし、これらの観点だけでは不十分である。そこで、本研究では新たなインターネット依存傾向尺度を作成し、また小川（1998）の考えをヒントに、インターネット依存と対人関係との繋がり方に焦点を当てた研究を行った。そこで、本研究では人と人との繋がりを対象にする『原子価論』（Hafsi, 1997）の考えに沿って、インターネット依存傾向とパーソナリティとの関係を明らかにした。

『原子価』とは、個人が持つ、対象と結合するための無意識的かつ不変的な心的手段のことである（Hafsi, 1997）。原子価は『依存原子価』『闘争原子価』『つがい原子価』『逃避原子価』の4つに分けられる。原子価の中でも頻繁に用いられるものを『活動的原子価』といい、その他の原子価を『補助的原子価』という。また正常に原子価が機能することを『プラス原子価構造』、うまく原子価が機能しないことを『マイナス原子価構造』と呼ぶ。

II. 仮説

小川（1998）が指摘しているように、インターネットに依存している人は、対人関係に問題がある。このような考えやHafsiによる原子価論に基づいて、マイナス原子価構造を持つ人はインターネット依存傾向が高いであろう。また、本仮説はインターネット依存と原子価構造の類型との関係に関するものである。すなわち、依存の原子価を持つ人は、インターネット依存傾向が高いであろう。

Ⅲ. 方 法

1. 対象

A大学に通う学生118名（男性=67名、女性=46名、不明=5名）を対象に調査協力を依頼した。その中でも、有効とみなした101名（男性=57名、女性=44名）を対象にした。

2. 尺度

本研究では次の2つの尺度を用いた。1つ目は、先行研究（例えば、鄭，2007；菱山，2009）を参考に作成した『新インターネット依存傾向尺度』。2つ目は、原子価構造を測る『Valency Assessment Test（以下、VAT）』（Hafsi, 1997）。

3. 手続き

VAT・新インターネット依存傾向尺度の2つとも心理学講義の時間を用いて、実施した。実施時間は、共に20分であった。

Ⅳ. 結 果

1. 新インターネット依存傾向尺度の信頼性分析

20項目全体の信頼性は.926であった。次に18項目で因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った結果、2つの因子が抽出された。そのあと18項目と2つの因子の信頼性分析を行った結果、18項目の信頼性は.924、1つ目の因子は.886、2つ目の因子は.895であった。

2. 新インターネット依存傾向尺度の因子分析

20項目を対象に記述統計を行った。算出した結果をTable1に示す。次に、図1が示すように、スクリープロットを用いて因子数を2に固定し、さらに共通性が低かった2項目を外して再び因子分析を行った。以上の結果を、Table2に示す。第1因子では、過剰にインターネットを通じてコミュニケーションをとるような項目が多かったため、第1因子を『過剰なインターネット利用』と命名した。第2因子は、インターネットから離れることの困難性を示す項目が多かったため、第2因子を『インターネット離れの困難』と命名した。

3. 新インターネット依存傾向尺度と原子価（t検定）

2つの因子と原子価構造の関係を明らかにするためにt検定を行った。その結果をTable3に示す。Table3が示すように、プラス原子価構造の値よりもマイナス原子価構造の値の方が高く、2つの因子とマイナス原子価構造に有意差が見られた。次に、2つの因子と原子価類型の関係を明らかにするために、一元配置分散分析を行った。その結果をTable4に示す。Table4が示すように、『過剰なインターネット利用』の因子と逃避原子価との値が他の原子価よりも高く、『過剰なインターネット利用』の因子と逃避原子価に有意差が見られた。

V. 考察

本研究の結果から、以下のことが明らかになった。1つ目は、t検定の結果からみた場合、マイナス原子価構造とインターネット依存との間に関係が見られた。このことから、正常な原子価構造を持つ人はインターネット依存になりにくいことが明らかになった。2つ目は、一元配置分散分析の結果から、『過剰なインターネット利用』の因子と逃避原子価との間に関係が見られた。このことから、逃避原子価を持つ人は、インターネットを過剰に利用することが明らかになった。

Table 1. 新インターネット依存傾向尺度の記述統計

項目内容	平均値	標準偏差
Q 1：家族と話をするより、チャットで話すほうが楽しい	1.733	1.038
Q 2：友達と遊ぶより、インターネットで遊んでいた方が楽しい	1.832	1.087
Q 3：オンラインに頼って、知り合いを作ることが多い	1.663	1.098
Q 4：現実世界よりもインターネットの方が、自己表現している	1.871	1.163
Q 5：他にしなければならぬのに、インターネット利用を優先してしまう	2.257	1.419
Q 6：インターネットの利用時間を短くしようと試みて、失敗している	2.287	1.359
Q 7：インターネットの利用時間のことで周りから注意されたことがある	2.297	1.418
Q 8：インターネットのせいで、家族との間にトラブルがあったことがある	1.881	1.186
Q 9：インターネット使用のために、お金をたくさん使ったことがある	1.743	1.205
Q10：使用時間を減らすべきだ、と考えたことがある	2.594	1.464
Q11：オンラインでしか、友人を作れない	1.208	.454
Q12：他にすべきことがあるのに、よくメールをチェックしてしまう	1.931	1.219
Q13：食事を忘れるくらいに、インターネットで遊んだことがある	1.842	1.271
Q14：食事をしながら、インターネットをしてしまう	2.248	1.445
Q15：睡眠時間を減らして、インターネットで遊んだことがある	2.743	1.647
Q16：チャットの時間を減らそうとしても、なかなかやめることができない	1.525	1.035
Q17：友人との話で直接会うよりもインターネットで済ませることが多い	1.832	1.209
Q18：誰かと出かけるよりも、インターネットで遊ぶ方を優先してしまう	1.624	1.038
Q19：友人関係を維持するためには、メールが不可欠である	2.327	1.327
Q20：帰宅するとすぐに、パソコンの電源を入れる	2.188	1.554

因子のスクリーンプロット

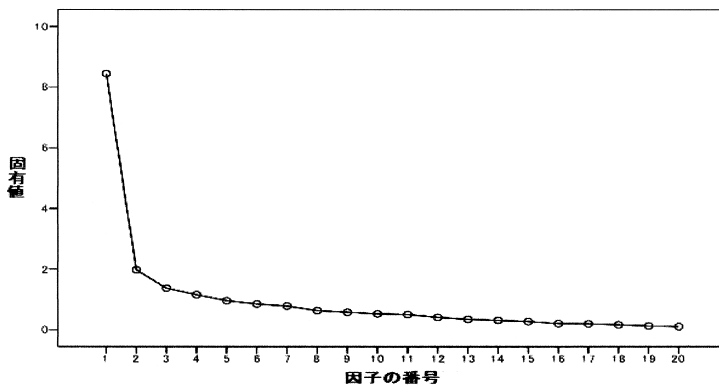


Figure 1. 因子のスクリーンプロット

Table 2. 新インターネット依存傾向尺度の因子分析結果

第1因子：過剰なインターネット利用	第1因子	第2因子
Q3：オンラインに頼って、知り合いを作ることが多い	.853	.240
Q4：現実世界よりもインターネットの方が、自己表現している	.770	.239
Q1：家族と話をするより、チャットで話すほうが楽しい	.727	.209
Q16：チャットの時間を減らそうとしても、なかなかやめることができない	.668	.226
Q2：友達と遊ぶより、インターネットで遊んでいた方が楽しい	.642	.464
Q17：友人との話で直接会うよりもインターネットで済ませることが多い	.628	.328
Q18：誰かと出かけるよりも。インターネットで遊ぶ方を優先してしまう	.605	.493
Q11：オンラインでしか、友人を作れない	.553	.277
Q9：インターネット使用のために、お金をたくさん使ったことがある	.531	.170
Q8：インターネットのせいで、家族との間にトラブルがあったことがある	.463	.383
第2因子：インターネット離れの困難		
Q6：インターネットの利用時間を短くしようと試みて、失敗している	.145	.867
Q7：インターネットの利用時間のことで周りから注意されたことがある	.324	.749
Q15：睡眠時間を減らして、インターネットで遊んだことがある	.341	.709
Q14：食事をしながら、インターネットをしてしまう	.409	.681
Q10：使用時間を減らすべきだ、と考えたことがある	.122	.653
Q13：食事を忘れるくらいに、インターネットで遊んだことがある	.400	.637
Q5：他にしなければならのに、インターネット利用を優先してしまう	.464	.533
Q20：帰宅するとすぐに、パソコンの電源を入れる	.412	.532

Table 3. 新インターネット依存傾向尺度と原子価の t 検定結果

因子	原子価		t 値	有意確率
	プラス	マイナス		
過剰なインターネット利用	1.641 (.801)	2.435 (.665)	1.108	.000
インターネット離れの困難	2.817 (.767)	3.386 (.558)	3.405	.000

注：数値は平均値、()内の数字は標準偏差を表す

Table 4. 新インターネット依存傾向尺度と原子価（一元配置分散分析）

因子	原子価				F 値	有意確率
	依存	闘争	つがい	逃避		
過剰なインターネット利用	2.201 (.778)	2.025 (.785)	1.652 (.796)	2.525 (.859)	3.292	0.024
インターネット離れの困難	3.205 (.579)	2.844 (.890)	3.243 (.865)	3.333 (.528)	1.767	0.159

注：数値は平均値、()内の数字は標準偏差を表す